

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520205

研究課題名（和文）プロメテウス神話：ヘーシオドスから近代への変容

研究課題名（英文）The Myth of Prometheus: From Hesiod to the Modern World

研究代表者

安村 典子（YASUMURA NORIKO）

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：20293376

研究成果の概要：

プロメテウス神話について初めて言及しているのは紀元前7世紀のヘーシオドスである。彼は『神統記』と『仕事と日』の両作品において、プロメテウスに関する物語を記している。『神統記』においては、プロメテウスとゼウスの知恵比べの物語が語られ、『仕事と日』では、ゼウスの火を盗んで人類に与えたプロメテウスに対する罰として、パンドーラが人類に送られたことが述べられている。本研究はこのプロメテウス神話を手がかりとして、(1)この神話のもつ意味を明らかにし、この神話を生み出した古代ギリシア人の精神を考察すること、(2)近代においてこの神話の意味が変容していったのはなぜであったのか、その理由を究明し、この神話のもつ今日的な意味を考察すること、以上の2点について研究することが、その目的である。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ギリシア文学、ギリシア神話、プロメテウス、ヘーシオドス、神統記、仕事と日

1. 研究開始当初の背景

プロメテウスに関する従来の研究は、比較神話学の立場から論じられることが多く、叙事詩としてのヘーシオドス作品を精読し、そ

こにおけるプロメテウス神話の意味を探求することは、比較的なされてこなかった。本申請者は、これまで叙事詩や神話に関する研究を続けており、この問題意識の連関として、

ヘーシオドスの作品の中でプロメテウス神話がどのように理解され得るのか、その新しい解釈を試みる。

本申請者はまた、ゼウスがオリュポスの神々の中で主権を得るに至った過程についても関心をもっており、ゼウスの主権に挑戦した神々についての論文も作成している。プロメテウスはゼウスに対して力ではなく、智慧によって対抗した唯一の挑戦者として、きわめて興味深い存在である。ゼウスとの対決という側面にも、光をあてて考察した。

近代においては、プロメテウスは人類の救世主として、特に文明をもたらす旗手として崇られる傾向があった。それはプロメテウスによって人類にもたらされたと伝えられる火が、我々の生活になくしてはならないものであり、文明の基礎として理解されたからであった。このプロメテウス理解の変容は、悲劇詩人アイスキュロスによるプロメテウス解釈の延長上にあると見てよいであろう。ゲーテの『プロメテウス』、カフカの同名の小説など、プロメテウスに対してオマージュを捧げた近代の作家たちも、アイスキュロスによるプロメテウス理解の影響を受けたと考えられる。

以上のような問題意識に基づいて、プロメテウス神話の研究を行い、関連する諸問題について考察する。

2. 研究の目的

数多くのギリシア神話の中でも、プロメテウスは今日に至るまでとりわけよく知られ、強いインパクトをもち続けている神のひとりである。しかしヘーシオドスの『神統記』と『仕事と日』に語られているプロメテウス像には、不可解な点が数多く見られる。最大の謎は、神であるプロメテウスが、なぜゼウスに反旗を翻して人類のために働いたのか、プロメテウスとは、一体何者なのか、彼は本

当に神なのだろうか、という問題である。プロメテウスの出自はイアペトスの子、とされているだけで、彼にまつわるその他の伝説・神話は、ヘーシオドスを除けばほとんど全く伝えられていない。ホメーロスにも言及されていないこの神は、一体何者なのだろうか。

人類にすべての悪をもたらしたとされるパンドーラとの関係も、明確ではない。もしプロメテウスの行為が発端となって、パンドーラを通して人類に悪がもたらされたのなら、プロメテウスは本当に人類の味方といえるのだろうか。

紀元前5世紀に、アイスキュロスは悲劇『縛られたプロメテウス』を作成した。この中でアイスキュロスは、人類のために身代わりとなって、横暴な神ゼウスから罰を受けるプロメテウス像を描いている。アイスキュロスのプロメテウス理解は、ヘーシオドスのそれとはかなり異なる点があるが、その相違はどのようなものであり、またその相違が意味するものは何なのか。

このような問題を、ゼウスによるオリュポス支配の構造と、それに対抗する挑戦者という連関の中で考察し、それによってプロメテウス神話の意味をとらえたいと考える。

また、プロメテウス神話の近代における変容を調べることにより、文明に対する理解の変遷と反省を考え、文明の負の側面がすでにヘーシオドスによって指摘されていることを考察し、この神話のもつ今日の意味について考えたい。

以上のような問題について、『神統記』を中心とするギリシア語テキストを精読し、新たなプロメテウス理解を提示することが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) ヘーシオドスの『神統記』と『仕事と日』に関する研究

プロメテウス神話の構造上の問題、用いられている言語、前後関係などを中心に研究した。特に『神統記』においては、ゼウスが彼の敵たちと決戦を行っている最中に、プロメテウスとの智恵による対決が語られていることに注目した。『仕事と日』については、パンドーラの壺や、彼女を妻としてむかえたエピメテウスとプロメテウスとの関係に焦点をあてて考察した。プロメテウスとエピメテウスの名前は「予知」と「後知」を意味し、相対立する存在であると考えられているが、ゼウスによって下される罰をプロメテウスが予見することができなかったとすれば、彼は「後になってから知るもの」にほかならず、両者はひとつの存在の表裏をなすものという考察を進めた。

(2) 関連部門の国内の研究集会への参加

京都大学、国際基督教大学、国際高等研究所などで開かれる研究集会へ出席し、各大学で開催されたシンポジウムなどにも参加して、研究を深めた。

(3) 資料、文献の収集

研究集会への参加の機会などを利用して、金沢大学図書館に所蔵されていない書籍の閲覧などを行った。また2007年と2008年の夏休みには、イギリス・ケンブリッジ大学図書館へ赴き、ヘーシオドスのスコリア（古註）などを参照した。

(4) 内外の研究者を交えての情報交換・討論会の開催

同志社大学名誉教授、浅香正先生を招聘し、ローマ時代の壁画に見られるフレスコ画像に関する討論会を行った。

4. 研究成果

本研究は次のような成果を挙げた。

(1) 『神統記』におけるプロメテウス神話の位置づけ

従来のプロメテウス研究は、ヘーシオドスの語る文脈についてはあまり論じられることがなかった。本研究ではまず、ヘーシオドスの作品全体の中で占めるプロメテウス神話の位置を考察し、それによりヘーシオドスが、この神話によっていかなる問題を提起しているのかという問題を考え、この神話の持つ深い意味を考察した。

『神統記』においてプロメテウス神話が置かれている位置は、驚くべきことに巨人族との戦いの途中である。ゼウスが父クロノスを打倒した直後、そしてテュポーンとの戦いの直前に、すなわち巨人族との戦いの物語を中断して、プロメテウス神話が語られている。これはゼウスにとって、プロメテウスと対峙し、彼を倒すことが、巨人族との戦い、とりわけ父クロノスや彼の最大の敵であったテュポーンの打倒と、同様の重要性をもっていることを示すものと理解される。

ゼウスは神々の頂点に立つ前に、多くの神々の挑戦を退けなければならなかった。しかしそれらの神々はすべて、力によってゼウスを倒そうと図るものであった。プロメテウスはそれらの神々とは全く異なるタイプの挑戦者である。ゼウスの主権に対して、智恵によって対抗した挑戦者は、プロメテウスただひとりであった。

このことから、プロメテウスとゼウスの対立の背景には、他の神話にはない大きな特徴があることが考察された。それはまず第1に、ゼウスが力において他に勝っているだけでなく、智恵においてもあらゆる神の頂点に立つものであることを、作者ヘーシオドスは

示したものである。このことは、ギリシア神話に少なからぬ影響を与えたと考えられているオリエントの主権交代神話（『エヌマ・エリシュ』、『アトラハシス』など）と、大きく異なる点である。オリエントにおける全宇宙の支配者は、物理的な力の強さによって、その地位を獲得した。しかしギリシアにおける主権交代神話は、その基本構造（子供が父を打倒して主権を掌握する）を取り入れながら、「全宇宙の支配者は智慧においても最も優れたものでなければならない」というギリシア独自の思想を、そこに組み入れたと考えられる。

プロメテウス神話のもつ第2の特徴は、この神にまつわる話には、必ず人間が介在することである。『神統記』において人間はしばしば言及されるが、いずれも慣用句の1部であるなど、短い言及である場合がほとんどである。したがって、人間についての物語が語られるのは、プロメテウスの物語においてのみであるといつてよい。このことは何を意味するだろうか。現存するヘーシオドス断片、喜劇断片など、類似物語を比較検討することにより、本研究では、プロメテウスこそが人類の創造者であると考えられる伝統が、すでに紀元前7世紀ころには存在していた、という証明を試みた。人類創造の話が『神統記』において全く言及されていないのは、ゼウスこそが「人間と神々の王である」と歌いあげることが目的とするこの作品にとって、プロメテウスによる人類創造は、ゼウスの名誉を脅かす話として、注意深く覆い隠されねばならない事柄であったからであると、考察された。

（2）プロメテウスなる名前について

ギリシアの神々の名前について、これまで様々な意味づけが試みられてきた。たとえばポセイドーンは「大地の夫」、デーメーターは「大地の母」、アフロディーテーは「泡

から生まれた女神」、のようなものである。しかしながら、これらはいわゆる「通俗語源説」に属するものであり、厳密な語源研究によるものではない。ギリシアの神々の中で、サンスクリット語に遡って語源的に説明される、由緒正しいインド・ヨーロッパ語起源の神名は、「ゼウス」だけであるといわれる。その他の神名は、語源的にギリシア語として復元できない、すなわち、ギリシア語の意味を正しく想定することはできない、といわれる。しかしながらプロメテウスは例外的に、「予知」あるいは「先に知る者」との明確なギリシア語の意味を持っている。これについて、関連テキストにおける考察を行った結果、プロメテウスという名は、実はこの神が本来持っていた名前ではなく、エピトトン（呼称）の1種なのではないか、という結論を得た。そして、本来の名を（おそらくゼウスの権威によって）抹消されたこの神は、元来はおそらく火の神であったこと、したがって「ゼウスの火」を盗んだのではなく、自らの権能である火を人間に与えたのだということ、以上のようなことを物語る伝説が、プロメテウス神話の基礎になっていたのであろう、ということが新たに見出された。

また、プロメテウスの弟とされるエピメテウス（後知）は、プロメテウスとの対比において考え出された神で、両者は表裏一体、換言すればひとつの神の2面であることが考察された。

（3）パンドーラの壺

ヘーシオドスの『仕事と日』に語られている「パンドーラの壺」の話は、通常次のように理解されている。すなわち火を与えられた人間に対する罰としてゼウスから与えられた壺には、諸悪が入れられており、パンドーラが蓋を開けた時にそれらの諸悪が出て世界

中に拵がった、しかしパンドーラが慌てて壺の蓋を閉じたために、「希望」だけはあとに残ったと。

しかしこの神話解釈には重大な誤りがあることが論証された。まず第一に、「希望」と訳されているギリシア語「エルピス」は、紀元前8 - 7世紀においては「未来の不確かな想定」という意味をもっていた。紀元前8世紀の叙事詩『イリアース』においては、動詞エルポマイの形で、「未来を予測する」という意味に用いられており、これは良いことと悪いことの両者を含む、未来の予測であった。この語が良いことのみを予測、つまり「希望」という意味に用いられるようになったのは、後代、とりわけキリスト教において、神の子イエスによる救済の希望という文脈において、主として用いられるようになったからであった。

従ってヘーシオドスの『仕事と日』においてパンドーラの壺に残されたのは、通常に解釈されている「希望」ではなく、「未来を予知する力」であったのである。

第2に、「希望」は壺の中に閉じ込められたのであるから、悪のはびこる世の中でも、私たちは希望を持ち続けることができる、と通常解釈されてきた。しかし『仕事と日』の本文テキストを厳密に読めば、「エルピス」が入れられた壺には堅固な蓋がかぶせられ、以前に諸悪が閉じ込められていたのと同じ状態に戻されたことは明らかである。すなわち、ヘーシオドスが伝える話によれば、「エルピス」は壺の中に閉じ込められ、永久に私たちの世界から失われた、ということになる。

これらの論証から、「壺の中にエルピスだけが残った」というパンドーラ神話は、「未来を知る能力が人間から取り去られた」ことを意味し、人間は将来について漠然と希望をもつことはできるが、未来を予知することは

できない、ということの意味するものと結論づけられた。アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』の中では、この点が明確に述べられている。すなわち「エルピス」(未来を知る力)は「プロメテウスの人類に対する恵みとして」(たとえば私たちが自分の死について知り得ないのは、「恵み」にほかならない)人類から遠ざけられ、代わりに「盲目の希望」だけが人類に与えられた、とされている。

(4) 近代におけるプロメテウス理解

近代におけるプロメテウス神話理解に関連して、文明の進歩のもたらす負の側面についても考察された。ヘーシオドスは、火がもたらされた後の代償を人類が払わねばならなかったことを、パンドーラ神話を用いて非常に興味深く語っている。すなわち先にも述べられたとおり、彼女が開いた壺からあらゆる悪が飛び出し、それによって人類に諸悪がまき散らされることになったのである。このことが意味するのは、一体何であろうか。

火は、人類のあらゆる文化的活動の根源である。火を使うことによって、人類は比類ない進歩を遂げたといえよう。しかしながら、そのことによって人類は本当に幸福を手に入れたといえるであろうか。公害や気象上の変化、生物界における異変、そのほか、私たちは文明の結果もたらされた負の遺産を目の当たりにしている。

火を与えられたことの代償として悪が世界にもたらされた、という物語が示すとおり、文明の進歩は必ずしも人間に幸福をもたらすとは限らないという認識を、すでにヘーシオドスはもっていたのではあるまいか。文明は諸悪と表裏一体の関係にあるという洞察を、ヘーシオドスは示し、そのメッセージを2700年前の昔に提起していた、というこ

とがいえるであろう。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

Noriko YASUMURA, Prometheus, A God of Forethought, 西洋古典論集、査読有、22巻、2009年(掲載予定)

[学会発表](計 1 件)

安村 典子、プロメテウスとパンドーラの壺、京都大学西洋古典研究会、2008年4月19日、京都大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安村 典子 (YASUMURA NORIKO)

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：20293376

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし